

高取小だより

令和6年6月14日



# 三本桜

第10号

ふかく考える子    あたたかみのある子    がんばりのきく子  
6月の目標：規則正しい生活をしよう

## 嫌いと苦手

6月に入り、気温が上がり、蒸し暑く過ごしにくい日が増えてきました。また、疲れが抜けにくく、ストレスをためている子どもがチラホラいるのも事実です。

さて、大人の世界であっても、子どもの世界であっても、必ずしも自分の好きなことや得意なことだけをして、生活をしていくことはできません。「やりたくないこと」「苦手なこと」「嫌いなこと」にも取り組まなければならないときがあります。次の文章は、直木賞作家・重松清さんのエッセイ『明日があるさ』の一節です。

最初のうちは「なるほどなあ」と半ばあきれ、半ば感心して（そこが親バカ）いたのだが、あいかわらず短絡的（筋道立てて考えずに物事を結びつけて論ずる様）な「キレた」事件が日替わりで並ぶ新聞の三面記事を見ているとき、ふと思った。「苦手」の段階を一気に乗り越して醸しだされた「嫌い」こそが、この時代の閉塞（とざされふさがること）的ないらだちを生んでいるのではないか。

「嫌い」は、自分から相手への一方的な拒絶である。それに対して「苦手」には、相手のことを認めたくて、しかし自分にはうまく受け容れられないんだというニュアンスがある。

「嫌い」は「相手だけが悪い」につながるが、「苦手」は「自分も悪い」に至る。自己嫌悪を募らせろというつもりは毛頭ないのだが、不快な状況や思いどおりにならない局面では、それを「嫌い」だと感じるか「苦手」だと受け止めるかで、対処（あるものや情勢に対して、適当な処置をすること）法は大いに違ってくるはずだ。

「苦手・嫌い」という言葉に限らず、日頃何気なく使う言葉が周囲の人々にどう受け止められているのか…。まず、その言葉を発する前にしっかりと受け手側の気持ちを思いやらなければ、と大いに考えさせられた次第です。私自身も何気なく言った一言で、他人にいやな思いをさせたり、またしたりした経験は少なからずあります。高取小学校ではそういうことができる限りないように一人一人が心がけてほしいと願っています。

まもなく、梅雨の季節となりますが、考え方や受け止め方を工夫し過ごしていきたいです。



## 田植え（5年生）

7日（金）、5年生が高取児童農園で田植えの体験をしました。この体験は、5年生が社会科で、日本の米づくりや農業について学習することに合わせて行っています。昨年続き、地域の人々の協力・指導の下、子どもたちはうるち米「あいちのかおり」の苗を植えました。

子どもたちの大半は、田植えを行うのは初めてでした。水が張られた田んぼを前に興味津々な様子で田んぼをのぞきこんでいました。地域の人から苗の植え方を教わった後、不安そうな表情で田んぼに入った子どもたちは、「うわぁ」「きゃあ」「足がはまって抜けない」「ぬるぬるする」と大はしゃぎ。泥だらけの手で、田んぼに張られたロープの等間隔の印に合わせて一生懸命に苗を植えていきました。田んぼにはほどなく緑の小さな苗が整然と並びました。

体験後の子どもたちは、「楽しかった」「途中で腰が痛くなってきたけれど、最後までやりきった」「とてもいい経験になった」「水の中は気持ちよかった。また、やってみたい」と話し、田植え体験を楽しむことができました。秋には稲刈りを体験します。子どもたちには、田植え体験をきっかけに、日本の米づくりや農業のこと、食糧問題のことを更に深く学んでほしいと願っています。

最後に、お忙しい中、子どもたちのために駆けつけてくださいました保護者の皆様、ありがとうございました。

